

レジオンドヌール賞受賞記念インタビュー

日本の科学を、日本の社会を『外から見る』

政策研究大学院大学教授 東京大学名誉教授
黒川清先生 (昭37卒)

先日フランスの国家勲章であるレジオンドヌール勲章を受章されたとのことですが、私が一番びっくりしました。思いがけないことでしたが、授賞式の時の話から2、3の理由があると考えています。

まず、世界規模で科学が「どう動いているのか、どうあるべきか」について発信し、取り組んできたことが評価されたと思います。私は2001〜07年にかけて日本学術会議の副会長、会長を歴任し、行政改革にも参加しましたが、特にその間、世界の科学観が変化した。私たちは、科学全体を俯瞰して科学に求められている役割を考へること、「科学が世界のどこに、誰と何をすべきか」を考へることを重視し、それに基づいて世界に発信、活動しました。こうして日本学術会議を通じて日本の科学者コミュニティは、世界的に評価されるようになりはいました。国内での認知度はいま一つですけどね。

またフランスなどから日本の科学・政策について取材を受けることが多く、大使館からも感謝されていることもあるでしょう。もう一つには、私が American Hospital of Paris という病院に、選抜して派遣している日本の医師の評判が良いことでもあります。

現在の日本の科学についてはどうお考えでしょうか。

日本の終身雇用は、従来の産業構造ならともかく、1990年以降のグローバル時代においては活力や創造性を減退させる一因であると思えます。デンマークでは労働者の3分の1が毎年転職するため、産業構造の変化に伴う労働力の需給の変動にすばやく対応でき、国の活力を高めています。医学を含む科学の分野も、競争力を高めるためには、科学者への投資と、一人ひとりの力を活かせる社会の実現が必要で、日本がOECD国で唯一、1993年からGDPの成長がないのは、こうした社会の実現に向けた変革がなされていないからなのです。

また、「外から日本を見る」感覚を育成することも大事です。私が2005年から代表理事を務めている日本医療政策機構は、global health、国内の医療政策、患者の立場という3つの視点から医療政策を考える独立、非営利、超党派の民間シンクタンクです。中でも global health の課題に向けた取り組み

では、海外のシンクタンクと連携してグローバルな agenda setting に参加するなど、世界を視野に据えて活動しています。

学生時代に他国と交流する機会としては留学があると思います。

若いうちに外国に出て日本を「外から見ると」視点をも身につけることが大事だと思っておりますが、残念ながら、中国・韓国から日本に留学する学生数に對し日本から両国への留学生数は少ないままです。また、米国への留学も激減しています。また、「日本」の東京大学に来た留学生、特に学部学生は、学生・教員の不熱心さに不満を感じるようです。日本の大学は入学試験までの勝負に終始するのではなく、第一義的に個々の学生の潜在能力を「引き出す」責務があると思います。

先生ご自身の留学での経験についてお聞かせください。

東大で医学博士を取得後、ペンシルバニア大学に2年間留学し、その後米国での生活を続け、UCLA から臨床も含んだ医師の道に進みました。14年余米国で医師として経験を積み、自然に日本を外から見る癖がついたことが、海外でも説得力のある発言・提言ができることにつながっていると思います。

特に印象的だったのは、ペンシルバニア大学に留学していたときの私のメンター Rasmussen 先生の言葉です。研究を始めた私に、三つのアドバイスを下されました。「あなたがここに来たのは、私の研究の手伝いではない、2年間のうちに独立した研究者になるためだ。」「あなたは腎臓が専門で、内分泌の私とは分野が異なるのだから、あなたと私は対等だ。意見の違うときはどんどん発言しなさい。」「英語がわからないうときはここにこゝろを、必ず聞き返しなさい。」「これも、科学者として、また一人として大事にしたい言葉です。ね。」

学生へのメッセージをお願いします。

東大に入学したことに満足しては潜在能力を持っていても発揮できませんから、たくさん本を読み、勉強もし、また英語の上達のために、学生のうちに外国に行ってみる事です。多様で異質な人たちの交流が、自分の可能性や目標を見つめることにつながるでしょう。これからのグローバルな時代では、多様な分野の競争仲間たちとの世界的な広がりがある大きな価値を生み出す。自分の能力を存分に発揮して世界の課題にチャレンジし、貢献する人材になってほしいのです。皆さんの可能性はとて大きいと思います。時々、私のサイト「www.kiyoshikurokawa.com」を訪ねてください。

——ありがとうございます



黒川清先生

(編集部 大山博生 千代田武大)